石川淳選集

第十卷

石川淳選集　第10巻（全17巻）

1980年8月7日　第1刷発行©

¥1300

著　者　石川　淳（いしかわ　じゅん）

発行者　緑川　亨

〒101 東京都千代田区一ツ橋2-5-5
発行所　株式会社　岩波書店
電話 03-265-4111
振替 東京 6-26240

印刷・精興社　製本・牧製本

落丁本・乱丁本はお取替いたします

目次

天馬賦　五
武運　九一
おまへの敵はおまへだ　一〇五
一目見て憎め　二〇一

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

小說十　戲曲

天馬賦

が、事はなにもおこらずに、やがて若いやつらはしぼんだ風船のやうにどこかに消えてゆき、巡査はそばにとめてあつたパトカーにもどつて、その車がはしり去つたあとはしばらくひつそりした。

すると、そこにネオンの看板をかけたシナ料理屋から、ひよつくり出て來たふたりづれの男の、これも成年すれすれと見える學生らしいのが、うすいセーターを肩に、シャツの色しろじろと、姿勢のくづれてゐないところはいましがた消えて行つた一むれの同類のやうでもなく、足はやく町角をまがつて、暗い横道のはうにすべりこんだ。

さきに立つてゆくのに、

「おい、オギ、もうぢきか。」

つれは性急に問ひかけた。

「ここまで來ていそぐことはない。」

「いや、おれは腹がへつちやつたんだ。」

一

夜ふけの町角にひとの影がもつれた。商賣はこれからといふシナ料理屋の窓に燈の色がながれて、そこだけうすあかるい道ばたに、巡査がふたり、それをとりかこんで、女まじりに七人ほどの若いやつらが立つてゐた。年ごろはみなはたちまへか、しまりのない服裝も似たり寄つたり、なんとか族と呼ばれるものが深夜から明方までさわぐといふ評判の土地がらである。こいつらはなにかつまらぬことで說教をくつてゐるらしい。さういつても、殺氣だつたけはひはなく、あらそふ聲もきこえない。職權のおせつかいと無言の反抗とがただすれちがつたやうであつた。事ありげに見えた

「なんだ。食つたばかりのくせに。」
「食ふそばから餓ゑるといふのがおれのたつた一つの特技だ。」
「つまらねえ自慢するな。」
「ちがふよ。どうも謙虚なきもちと關係があるやうだ。」
さういひながら、暑くてたまらぬとでもいふふうに、シャツのぼたんをはづして、だいぶひえて來た夜風にはだかの胸をさらした。年には似合はぬ濃い胸毛がそよいで、たくましい肩の上に、しかしまだこどもつぽい顔が笑つてゐた。
「勝手にかぜでもひけ……しつ。」
うしろからちかづく足音に、聲をひそめたが、ただの醉ひどれがふらふら通りすぎて行つただけであつた。
「あんまり目立つてくれるなよ。胸毛をかくせ。行先はめつたなやつに知られたくないところだ。」
「わかつた、わかつた。シャツのぼたんをかけると、おれはいつでも變裝してるみたいなんだ。」
すこし行くと、オギと呼ばれたのが足をとめて、あたりに目をくばつた。
「ここだ。」
そこに、中ぐらゐの住宅と見えて、舊式な西洋ふうのつくりの、門はなく、石段をあがつたところに、がつちり黑い扉がしまつてゐた。ちかづいてベルを押すと、やがて扉にとりつけた小窓があいて、內部にひとのけはひがした。オギがそのちいさい穴の口にささやくやうに、
「ムンツェルさんの友だちです。」
應へることばはなく、小窓がしまつて、內側の掛金をはづす音がした。扉を押すとすぐにあいて、そこにはすでにひとのすがたは消えて、おぼろげな照明の中に、すりガラスの扉がまた正面にあり、横手の壁にそ

つて狭い階段が下に通じてゐた。
階段をおりながら、
「おい、ムンツェルさんてだれだい。」
「おれも知つちやゐないよ。だまつて。」
階下には電燈はつかず、奥深く見えたくらやみの中に、壁を手さぐりに踏みこむと、つい突きあたつたところが壁、いや、扉だらう、なにかの仕掛でそこがぱつくりあいて、淡い光がながれて來た。オギがすすみ入ると、ふりむいて、
「おい、はひれよ、ムラキ。」
ムラキはちよつと足をとめて、すぐにははひりかねたやうであつた。オギのさそひに乗つてここまで來たものの、それがなんのためのさそひか、ここがいかなる場所か、全然知らされてゐなかつた。おい、おれたちのあつまるところに來てみないか。おまへいくらか素質がありさうだ。オギはたださういつた。うむ、行かう。わけも聞かずにさつそく應じたのは、友だちを信頼してゐるといふよりも、そそつかしい素質があつたといふことになりさうだが、じつはムラキはおよそ理由とか説明とか小うるさいものを氣にするやうな性分でなかつた。わけなんぞ聞かなくても、行つてみればわかる。しかし、この場に來て内部のけはひをのぞいてみたかぎりでは、なにがどうなつてゐるのか、ざつと見當もつかない。淡い光の下に、小さい椅子がいくつかばらばらに散つてゐるだけで、そのほかの裝置はなく、ひとは……たしかにひとが何人かゐることはゐるが、椅子にかけたのもあり、床に敷きつめたカーペットの上に寢ころんだのもあり、めいめい勝手なそぶりで、たがひに無關係にひとしいもののやうに、そこにことば一つ、咳一つ立たなかつた。ガソリンをぶつかけても燃えあがらないやうな、からつぽのしづかさ。これではひとがゐないも同然ではないか。ムラキ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

は道すがらもしかすると祕密の深夜バーか、ゴーゴーのやつらでもあつまる場所かとおもつて來ないでもなかつたが、ここには酒のにほひはおろか、たばこのけむりすらちらつかない。突きあたつたところはがちんと來る壁ではなくて落し穴に似た空白であつた。ただし、足をとめたのはほんの一瞬。元來ためらふといふことを知らないやつである。ムラキが中にはひると、うしろにひたと扉がしまつて、それはそつくり壁になつてゐた。

靴音はカーペットに吸ひこまれて消えた。床をめぐつて隅のあいたところに來ると、オギは腰をおろして壁にもたれた。ムラキもおなじ姿勢をとるほかなかつた。

「ここは酒もたばこもいけないのか。」

聲もしぜんに低く出た。

「バクチもいけない。氣をそらすもの、まぎらすものはすべていけないとおもへ。」

「ヤクを打つといふのでもないらしいな。サイケのグループとはちがふムードだ。」

「クスリの作用でラリつてるのは人間のことばぢやない。」

「待つてくれ。さうきめつけるのは早まりすぎやしないか。思想の作用でラリつてるのと、どつちがどつちか。」

「おまへのおしやべりが場ちがへだといふことを注意するのに、早まりすぎることはない。ここにあるのは沈默だ。」

「みんないやにしんとしてるな。死んでるみたいだ。」

「死をみつめてるといへよ。今はメディテイションの時間だ。」

「ふーむ。なにを考へる。」

「おまへに考へろとはいつてない。おまへはしばらく

だまつてればいい。」
「だまつてればどうなる。」
「おまへにしても、なにか考へ出すことになるだらう。」
「それでも、好奇心はだまつちやゐられないよ。いつたいここはどういふ場所なんだ。しやべりながら考へる權利があるね。メディテイションといつて、なにか修業でもしてるのかな。禪坊主の眞似でもないやうだし。祈つてるといふ恰好でもなし。ただゐねむりして夢でもみてるのとちがふか。」
「もし欲するなら、修業といつてもいいし、夢といつてもいいだらうが、ただそれだけのものぢやない。」
「それだけのものであらうとなからうと、おれはかうしてうすぐらいところにぢつと寢ころんでることは欲しないよ。小聲でこそこそといふ趣味はもたないね。この部屋は唐手の稽古でもするのによささうだ。わーつと立ちあがつて……」
「立ちあがつたときには、たとへばそれが唐手であつてもいけないことはない。」
「もし欲するならかね。さう、おれは欲するよ。唐手はともかく、せめてこの照明はどうにかならないか。ぱーつとあかるくしたら、ぼんやり寢ころんでもゐられまい。ほんとに死んでるんでなければだが。」
オギは腕時計をすかして見て、
「とくにおまへの希望を叶へてやるつもりはないが、メディテイションの時間はちようど切れた。おい、おまへ立ちあがつてそこの壁にあるスイツチを押してみろ。」
「押せばどうなる。」
「おまへらしくもないことをいふな。押せばわかる。」
ムラキは立ちあがつて壁のスイツチを押した。とたんに、電燈がまばゆく照つて、みな椅子から床から跳

ねおきた。たしかにメディテイションに洗はれたばかりといふ冴えた顔つきもあつたが、中にはうたたねの夢やぶれて目をこすつたらしいのもまじつて、年ごろはおなじやうな十何人、いきいきとむれ立つと、室内にはたちまち若い氣合が波をうつてみなぎつた。

「みんな、これはおれの友だちのムラキといふんだ。」

オギの紹介のことばはそれだけであつた。

「ムラキ、これからいつしよに附合つてゆくうちには、みんなの名まへはいちいちはなくても知れることだ。人間のできぐあひもおひおひに知れるだらう。」

それでしまひかと見えたが、オギはあらためていひ出した。

「ところで、おれたちはこの場で發言したことはかならず實行することになつてる。ウソもシヤレも常談もない。うつかり口をすべらしたではすまされない。ムラキ、おまへはさつきこの部屋は唐手の稽古によささうだといつたな。おまへはそれを欲すると、はつきりいつたな。」

「ああ、いつたよ。」

「さつそくそれを實行してみせてくれ。」

ムラキは無雜做にこたへた。

「ああ、いいよ。だが、おれはこの場の餘興に出演するといつたおぼえはないから、ひとりで型を使つてみせる義理はない。だれか相手があればだ。ただし、相手しだいでは、これは稽古ぢやなくて、どうもケンカになりさうだ。わるくすると、コロシにだつてなりかねない。コロシまで實行してみせることはないやうだ。」

すると、むれの中から一人、ぐつとすすみ出て、

「おれはワクといふんだ。おれは唐手をならつたことはないが、ボクシングをやつてる。ケンカはときどきやつてる。ケンカといふなら相手をしよう。その結果

がコロシになりかねないにしても、おれの知つたことぢやない。コロシはまだやつちやゐないが、それはさきのことだ。おれはさきざきの心配はしないうまれつきだ。」

ムラキはあきれたやうにワクを見た。

「行きがかりといふのはをかしなもんだな。おれは唐手の稽古といふ健康な發想をしたつもりでゐたのに、これぢやぬかるみにぼちやんと足を取られたみたいだ。ケンカは好まないね。じめじめしていやだよ。しんきくさい見世物ぢやないか。餘興はことわると、今いつたばかりだよな。」

ワクの目がけはしくなつた。

「その態度はマジメではないぞ。おれが本氣で突いてかかつたらどうする。」

「迷惑だね。逃げるところはないし、どうするかわから……」

とつさにワクが突きかかつて來た。二つのからだが搦みあつたと見るまに、ワクは床にたふれて鼻血の中に顏を伏せた。ムラキは立つたままであつたが、これもくちびるがすこし切れて血がにじんでゐた。

「それまで。」

オギが割つて入ると、うしろに女のすずしい聲があがつた。

「もうやめなの。はじまつたばかりなのに。惜しいみたい。それでも、この場で血がながれたのは、ほんのすこしにしても、今夜がはじめてね。メディテイションからめざめると、そこに血の痕。これぢや刺戟がたりないけど、まあ緣起がいいといふことね。」

オギは取りあはずに、

「みんな、けふはこれで解散だ。ワクは鼻血がとまるまで……」

「上の部屋で休めばいいわ。わたくしが手當してあげ

る。さう、ムラキのくちびるも消毒しといたらどう。そこの椅子でちよつと待つててね。」

壁と見えた扉がまたあいて、みな音も立てずに散つて行つてしまふと、オギとムラキとがあとにのこつた。

「ムラキ、この場でおこつたことは外に出たらすべて氣にしないことにしてある。みんなさうだ。ワクもな。おまへも……」

「外に出なくたつて、おれはてんで氣にしちやゐない。」

「それでいい。」

ムラキはくちびるにあてたハンカチーフの中でつぶやいた。

「なにがいいのかな。」

「いけないとでもいふのか。」

「いや、この場に浪費された時間のことをいつてるんだよ。なにを考へようとするためか知らないが、メディテイションなんぞと稱して、おほぜいあつまつて、この夜の時間を割りつければ、どこがいいといふんだ。生活上ムダぢやないか。」

「考へるとか考へないとか、そんなこと、たいしたことぢやない。ねむくなつたら、じつはゐねむりしてたつてかまはない。それがムダかどうかといふ心配なんぞに、おれたちは時間を浪費しちやゐないよ。」

「それで、なにをしてる。」

「堪へるといふことをしてるんだ。」

「なんに堪へる。」

「アルコールもタバコもバクチもクスリも、それにおしやべりまでも絶ちきつた時間に堪へるといふことだ。おれたちはみづからえらんだ課目として毎週一度この夜の時間をもつやうに自分を強制してる。これはすくなくとも生活にあつけらかんとゐねむりばかりはさせておかないといふぐらゐの效果はあるやうだ。」

「それはアルコールもタバコもバクチもクスリも、それにおしやべりまでも大繁昌をきはめてる時間に堪へるといふことと、生活上の意味からいつて、どれほど御立派なちがひがあるんだ。」

「なにをいつてる。さういふ大繁昌の時間なら、おれたちがのべつに通過してるぢやないか。堪へるだつて。おまへもぽかぽか浮いてる仲間だらう。それだから、おれたちはこの夜の時間を發明……いや、ここでなにかを發明する必要があるんだ。」

「なにを發明するんだ。」

「ナンセンスといひたさうな顏つきだな。たとへば、今夜のことでいへば、これは發明なんぞとだいそれたことがいへるもんぢやないが、おれたちは一つはづかしいほどちつぽけな發見をしたよ。だまつてることを知らないおまへのくちびるからながれた血をだよ。たかがみみずつぱれの血にしてもだ。おまへそれつぱかりの傷がそんなに氣になるのか。なんだい、その洟つきれでおさへた恰好は。おまへにして、處女のはにかみとでもいふクラシツク女優みたいなしぐさぢやないか。それこそナンセンスだ。」

傷はしかしみみずつぱれよりもいくらか深いやうであつた。ハンカチーフは血に染んでゐたが、ムラキはそれでも口をうごかしていひかへした。

「さういふおまへのおしやべりはみんな密室の錯覺だ。深夜の地下室のな。」

オギは笑ひだした。

「地下室だつて。おい、ぼんやりするなよ。さつきこの玄關に來たとき、石段をのぼつたよな。そして、玄關からまた階段をおりてここに來たよな。なにが地下室なもんか。錯覺をおこすな。」

オギはかなたにあるいて行つて、黑い厚いカーテンをひらいた。その裏側にまたうすいカーテンがあつて、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com